

2019 年度 センター試験 倫理（本試験） ワンポイント解説

第1問	問 1	①近代以前に青年期はない。②近代以前も以後も通過儀礼は必要。④子どもと大人のどちらにも帰属しない人間は境界人という。
	問 2	①着床前診断は受精卵が 8 つに分裂した段階で行う。②デザイナー・ベビーの是非は現在論争中。③夫婦の受精卵を代理母に移植する場合は、子どもは代理母でなく、夫婦の遺伝子を受け継ぐ。
	問 3	①男性の 40～59 歳では減少。③平成 28 年では、60 歳以上の割合では男性の方が女性より高い。④女性の 60 歳以上では減少。
	問 4	ステレオタイプとは、主に特定の間人集団に対する固定的見方を意味し、柔軟でなく、客観的とも科学的とも言えないことが指摘される。①男性を型にはめて捉えている。
	問 5	①女子差別撤廃条約は 1979 年に国連総会で採択され、1980 年日本も署名。②子どもの権利条約は 1989 年に国連総会で採択。③NPO は政府でなく民間主導。④「人間の安全保障」とは、紛争の抑止と平和の維持などの国家安全保障と異なり、一人ひとりの人間を守ることを主眼とする。
	問 6	②核家族は、戦後急増し、その後横ばい状態となり、現在は単独世帯の増加により微減している。なお、高度経済成長以前の日本でも、大家族が一般的な家族形態だったとは必ずしも言えないので、①も正解といえる。
	問 7	①ヤスパースは、死・苦悩・争い・罪などの限界状況は克服できないとした。②「生命への畏敬」を唱えたのはシュヴァイツァーである。③戦前日本の超国家主義を「無責任の体系」としたのは、丸山真男である。
	問 8	構造主義者はレヴィ＝ストロースとフーコーである。言語論にヒントを得て、人間の意識と言動が社会構造に規定されるとしたのはレヴィ＝ストロースであり、人間の意識を拘束する社会構造を明らかにすることで自由なる自己の回復を訴えたのはフーコーである。
	問 9	ロールズは、世間に愛があれば正義があると述べる。①正義の前提として愛がある、というのではない。②正義を行う対象は愛する者ではない。④正義のために愛を失うことには触れていない。
	問 10	①A は第 6 発言で「何でも自己の自由、ではない」という。②A は家族機能の外部化に言及していない。家族機能の外部化とは、家族の機能が家族外部の機能的集団によって代替されていることをいう。④C は第 2 発言で「血縁は関係ない」という。
第2問	問 1	①プラトンが真実在としたのはアイデアのみであって、自然界の諸事物ではない。③ストア派は、自然の理法と理性を同一視した。④キリスト教もユダヤ教と同様に神による万物の創造を認める。
	問 2	①引用文には「致死薬を与えることはせず」とある。②「私の生活と医術をともに清浄かつ敬虔に守り通します」とある。③「どの家に入っていくにせよ、患者の利益になるように考え、いかなる意図的不正も害悪も加えません」とある。
	問 3	朱子は、理は自然界では理法として、人間の心の中には理性として存在するとし、また気はガス状の気体として自然界に存在すると考えた。
	問 4	②仁義礼智信の五常を解いたのは董仲舒である。③五蘊のうち色のみ物質的要素であり、受・想・行・識は精神作用をいう。④ブッダは諸行無常や諸法無我などを主張して、心や身体が変わらないというバラモン教の考えを否定した。
	問 5	①自由思想家のなかでジャイナ教の開祖ヴァルダマーナ(マハーヴィーラ)は、苦行によって輪廻から解脱することを解いた。②パウロは、イエスの死は人間の罪の身代わりとなった贖罪である、と考えた。④儒家の厚葬説(手厚い埋葬)に対し、墨家は薄葬(簡単な埋葬)を主張した。
	問 6	②イエスは「律法の成就」といい、律法は否定していない。③④律法の厳格な遵守を解いたのはユダヤ教であってイエスではない。
	問 7	①神の啓示は預言者であるムハンマドに対してだけ与えられた。②ムハンマドは預言者であって救世主ではない。④スンナ派は多数派であり、シーア派は少数派である。
	問 8	①慈悲は、生きとし生けるものすべてを対象とする。②親子や兄弟の間に生じる愛情を、様々な人間関係に広げることを解くのは儒教である。③慈悲の実践は、特に大乘仏教で唱えられるが、上座部仏教でも否定されない。
	問 9	①本文では、第 1 段落冒頭で「自然とのつながりを回復すること」が述べられ、自然を自らに合わせることは述べていない。②第 3 段落末尾で「他者との関係を結ぶ」とあり、他者への依存から自己を解放することは述べていない。③超越的存在との絆には触れられていない。

第3問	問1	真心は本居宣長の用語で、よくも悪くも生まれたままの心という意味なので、アは誤り。清き明き心は、古代日本人の神に対する偽りのない心情をいうので、イは正しい。なお日本の神々は一般に善悪とは無関係なので、ウの「神が定めた善悪の基準」という記述は誤り。
	問2	①日本で初めて受戒制度を確立したのは鑑真である。②④一遍は時宗の開祖であり、踊り念仏を広めたが、『立正安国論』と『南無妙法蓮華経』は日蓮による。
	問3	仏教の観点からは、この世は無常である。『葉隠』は山本常朝の著作で、武士道を論じ、主君への絶対随順と不断の死への覚悟を説いた。
	問4	④「いき(粹)」は、遊びの世界の美的理念で、さっぱりとして洗練された美意識をいう。
	問5	引用文は、主君の心が正しいと、それが正しい行動となって外に表れ、その結果として主君の命令が守られる、という趣旨である。②主君の行動が正しいかどうかにかかわらず、その命令が守られる、というのは誤り。③主君の心と行動が正しければ命令が守られるのであって、主君の命令の内容が正しければ、ではない。
	問6	①復古神道を唱えたのは平田篤胤。③④会沢正志斎は尊王論を唱えているので、公武合体論とは異なる。また神道を中心として儒学をそれに合わせたので、「儒学に基づき」という箇所も誤り。
	問7	①『代表的日本人』は内村鑑三の作。②日本の西欧化に尽力し、脱亜論を主張したのは福沢諭吉。③『武士道』を著してキリスト教的な人格主義教育を行うことを説いたのは新渡戸稲造。
	問8	②西田は主客未分を説いて二元的思考を否定した。③④西田は「絶対矛盾的自己同一」という用語で、多なるものと1つの世界が互いに矛盾しながらも同一である、と考えた。
	問9	本文では、第2段落末尾で「あるべき身体的行為の実現と心のあり方の追求とは切り離せない」とし、第3段落半ばで「心と行為の関係を重視」とし、最終段落の冒頭で「心が行為と不可分」としており、心と行為のいずれをより重視するとはいっておらず、①②は誤り。また、本文には荻生徂徠は議論に偏る朱子を批判しているとあり、④の学問によって心を分析するという箇所は誤り。
第4問	問1	①はプラトンの哲人政治。③は王権神授説。④はホブズの社会契約論。
	問2	「種族のイドラ」は、人間共通の感覚や精神の制約によって生じる偏見である。「劇場のイドラ」は、伝統や権威のある学説を盲信することから生じる偏見である。
	問3	「繊細の精神」とは、パスカルの用語で、心情にもとづいて直感する精神をいう。『省察』はデカルト、『エチカ』はスピノザの作である。
	問4	①③ヘーゲルによれば、外面的法と内面的道徳が弁証法的に統合されて人倫となる。また④でいうように、国家同士を争わせて対立状態に至る、とは主張されていない。なお「理性の狡知」とは、絶対精神が人間の衝動などを利用して、自由実現のための道具とすることをいう。
	問5	九鬼周造によれば、あることもないこともできるものが現実に起こったものを「偶然」といい、それが人間の生存に大きな意味を持つ場合を「運命」という。①では運命が「取るに足りない偶然」としてあるので誤り。③では偶然を「めったに起こらないことが起こったもの」としている点が誤り。②運命や偶然は「起こることも起こらないこともあり得たのだと考えることによって、…その運命を愛」とは、引用文には記されていない。
	問6	④サルトルは「実存は本質に先立つ」と述べ、人間においてはあらかじめ自らの本質が定められてはいない、と考えた。
	問7	②ダーウィンの進化論は、生物の種はそれぞれ固有の祖先から変化してきたという説であるので、「変化することはない」は誤り。③スペンサーによれば、社会は強制的軍事社会から自発的産業社会へと進化するので、「軍事的指導者が支配する社会へと進化」は誤り。④スペンサーの適者生存のメカニズムは、自然界にも社会にも適応される法則であり、国家が人為的に統制するものではない。
	問8	②「個人の不運は…いつかは必ず解決される」とは述べられていない。③「悪しき出来事も人間の力によってすべて最善の運命へと変え得る」とは主張されていない。④「運命の行く末全体はあらかじめ見通せる」とは述べられていない。